

・ 実体論 (substantialism) から 関係論 (relationalism) へ

- 形而上学・普遍主義 への批判
- 西欧近代知の 限界の発露
- 価値の絶対化 から 価値の相対化 へ

・ 「神は死んだ」(ニーチェ) : キリスト教の価値の相対化

- フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844- 1900, 独)
- 古典文献学者、哲学者
- 著作『ツアラトウストラはこう語った： 万人のための、そして何人のためでもない書物』(1885)
- 人間や社会に意味を与える 超越的・絶対的な存在はどこにもない (by ニーチェ)。
- 「ルサンチマン」(ressentiment 仏)
- 「弱者」の物語。

・ 「パースペクティヴィズム」 : 西欧近代知の相対化、権力と歴史叙述の関係

- パースペクティヴィズム = 相対的な価値を絶対視する傾向
- 「すべての価値は、……、人間の支配形態を維持し上昇させるのに有用だからという理由で生まれ、事物の本質の内へと誤って投影されたものであり、パースペクティヴィズムの成果にすぎない。自分自身をものごとの意味や価値の尺度とみなすのは人間の幼稚さの極みである」(ニーチェ『権力への意志』)
- 「客観的認識」(絶対的真理, 実体)はありえず、一切は特定の視点から見出された「解釈」である。
- 「勝利者史観」への批判的検討 (渡辺裕)
- 権力者と「真理」の関係, ミシェル・フーコーへ。